

せんだんの杜／中山小学校区での展開図

[H15.03.01]

<中山地域の6つの家の概要>

- ①中山の家1 [介護保険：通所介護（痴呆）]
- ②中山の家2 [介護保険：通所介護（一般）、訪問介護、自主：お泊り、居住]
- ③ひまわりの家 [特養の「ひまわり」ユニットの入居者と「デイホーム・さくら・ひまわり」ユニットの入居者3人が地域生活を体験]
- ④2丁目の家 [障害児の放課後ケア、レスパイトケア]
- ⑤よりみちの家 [ショートステイの利用者3人と特養の「道草の間」ユニットの入居者3人が地域生活を継続・体験]
- ⑥街角サロンもうもう亭 [自主事業：高齢者・子ども・障害者・地域福祉・ボランティアなどの総合相談所、障害者の働く拠点]

中山3丁目
(616人/23.4%)

中山4丁目
(2,398人/11.4%)

中山6丁目
(1,201人/20.3%)

町名
(人口/高齢化率)

中山5丁目
(1,575人/16.2%)

中山の家1

中山の家2
小規模多機能ホーム

ひまわりの家
地域生活体験の家

2丁目の家
放課後ケア

よりみちの家
地域生活体験の家

中山2丁目
(1,340人/27.0%)

中山1丁目
(1,162人/21.8%)

サブセンター

街角サロンもうもう亭

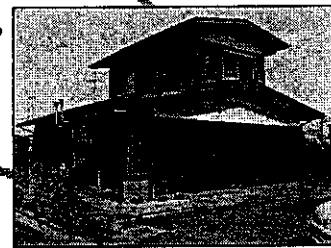
荒巻本沢1丁目

荒巻本沢3丁目

滝道

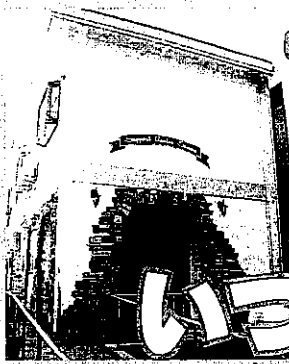
(1,544人/23.4%)

桜ヶ丘1丁目



中山小学校区概況
 人口：10,314人
 世帯数：4,399世帯
 高齢化率：18.9%
 (H14.10.1現在)

在宅介護の不安を解決



すぐそばで24時間 フルサポート

いつでも頼れる

「福祉のコンビニ」

新潟県長岡市 地域分散型「サポートセンター」

個室化やユニットケア、グループホームなど施設的ケアに注目が集まっているが、本来なら、住み慣れた地域の中で、それまでの暮らしをずっと続けたい——。この在宅ケアのニーズがごく当たり前であるとともに、日本の介護システムでは最も難しい課題でもあった。だが、人口19万の新潟県長岡市で、この困難な課題に挑戦する動きが始まっている。それが地域分散型「サポートセンター」構想だ。

取材・文/田中元
イラスト/Knob

介護保険制度がスタートして2年が経過した。そもそもこの制度は、在宅介護を充実させるという理念があったはずだが、「在宅よりも施設」を希望する傾向がむしろ強まっている。

両者を比較した場合、同程度のコストを負担しても、施設では24時間365日、すぐそばに「介護のプロ」がいる。一方、在宅では要介護者やその家族に何かあっても、すぐそばにサポートをしてくれる存在は少ない。

「どこに住んでも目と鼻の先に支援センターやヘルパーステーションがあり、24時間365日対応してくれる仕組みがあれば」というのが、在宅で要介護者を抱える世帯の切実な願いだ。

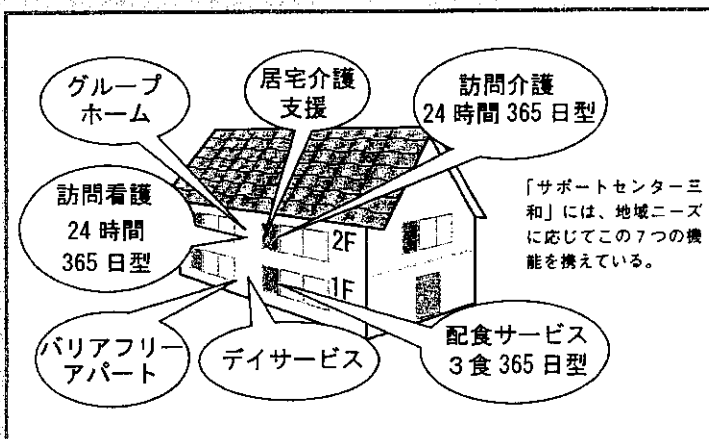
長岡駅から10キロ圏内に 6カ所のセンターを計画

住み慣れた地域、わが家で、施設なみの安心を——このビジョンに挑戦しているのが、新潟県長岡市にある高齢者総合ケアセンター「こぶし園」である。同施設はJR長岡駅の西約10キロに位置し、100床の特別養護老人ホームのほか、80床のショートステイ、デイサービス、さらには訪問介護・看護ステーションなど、介護にかかわる総合的なサービスを行ってきた。

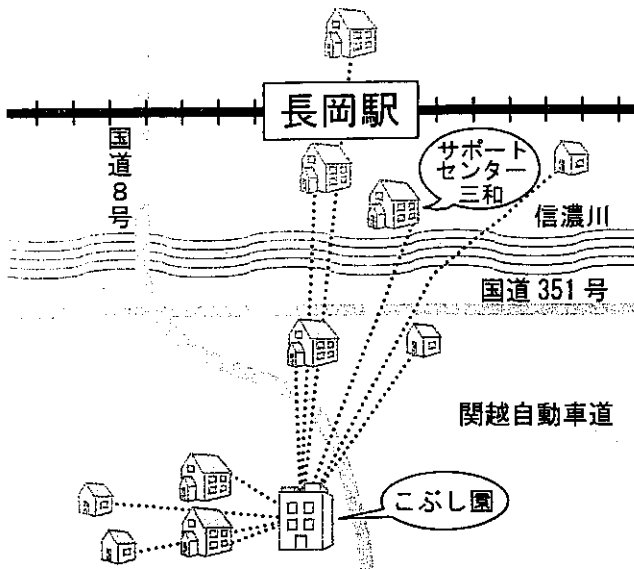
この「こぶし園」が抱える資源と

ノウハウを活用して、住み慣れた地域を離れることなく、施設並みの安心を確保する、これが「こぶし園」による地域分散型サポートセンター構想だ。

サポートセンターは、24時間365日型の訪問介護・看護をはじめとする各種在宅サービス、グループホーム、一日3食365日型配食サービスなど、地域ニーズに合わせて「いつでも頼れる」機能を兼ね備えたもの。これを長岡駅と長岡ニュータウンを結ぶ市街地約10キロ圏内に6カ所設置し、加えて6カ所のサテライト型デイサービスを配置することで、街のすみずみまできめ細かい在宅サービスのネットワーク



市街地10キロ圏内にサポートセンター6カ所、そのほかにサテライト型デイサービスも



ークを行き渡らせようとしている。

大規模施設の機能を地域に分散するべき

こぶし園・施設長の小山剛さんは、「なぜサポートセンター構想なのか」についてこう語る。

「特養ホームのユニット化や個室化に高い評価が集まっていますが、建設コストなどの問題から、その多くは住宅密集地から離れた地域にポツンと建てています。つまり、そこに入居するためには住み慣れた地域を離れ、なじみの人々や環境と別れなければなりません

ん。家族でさえなかなか足を運びにくい条件の中で、ユニット化や個室化を唱えてどれだけ意味があるのか。地域から離れた場所に大規模なユニット型特養を建設する費用があるのなら、その機能を住み慣れた地域の中に分散すべきだと考えるわけです」

昨年12月に長岡駅の南西約2キロの所に、サポートセンター第1号の「サポートセンター三和」が完成した。4部屋のバリアフリーアパートと8部屋のグループホーム、さらに15名定員のデイサービス、24時間365日型の訪問介護・看護ステーション、居宅介護支援事業、一日3食365日型の配食センターが備えられている。もともと建築会社の社員寮だった2階建てのハイツを活用したもので、改築にかかった総費用は約5000万円。

エレベーターや各部屋に取り付けられたスプリンクラー式の火災報知器など、高齢者が住む上で欠かせない部分には相応の資金をかけている。一方、家具類などは探す手間さえ惜しまなければ、質のよいものがかなりの低コストで入手できたという。エアコンもモデルチェンジ前のものであれば、新品でも格安で取り付けができる。

「まっさらな土地に20億円で大規模特養を建設する費用があれば、この規模のサポートセンターが地域に40カ所設

立てできる計算」と小山さんは言う。

24時間365日体制が本当の安心をつくる

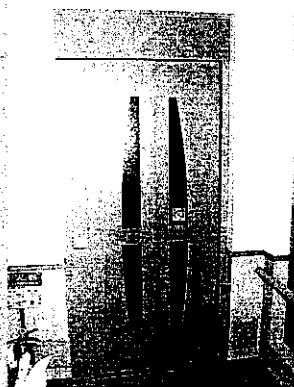
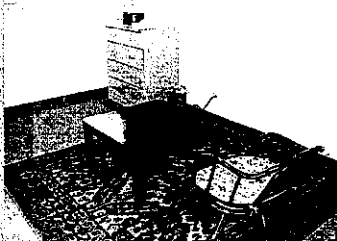
ハード面にお金をかけるより、小山さんがこだわっているのは、24時間365日対応できるというサービスそのものの内容である。施設であれば、最低でも三度の食事時はすぐそばに職員がいる。夜中に何か不安なことがあっても、ステーションにはいつも明かりがついてだれかがいるし、ナースコールを使えば、短時間で職員が枕元に飛んでくる。これが、施設に在ることの「安心」というメリットだ。

この安心を地域の中でいかに保障するか、サポートセンターの意義だ。まずポイントとなるのが3食365日型の配食サービス（1食330円）。これで最低一日3回、利用者の安否が確認できる。もし夜間に何かあっても、センター自体が24時間機能している、最低限の緊急対応がきく。

「まさにコンビニエンスストアの発想です。最低限であっても、身近ととにかく対応してくれればいい。もっと深くかわることが必要ならば本体の「こぶし園」につなげます。さらに「こぶし園」では年間40000人のボランティアが活動していて、地域全体に福

社にかかわる人材も根付いています。これも大きな要です。ここまでの安心が確立できてこそ、在宅介護が初めて施設介護と肩を並べることができるのです」（小山さん）

今年の4月に第2号、第3号のサポートセンターが次々とオープン。すでに第1号の三和の周辺には、診療所や薬局などが集まり、不動産会社が近くに高齢者向けアパートが建設できないかを検討する動きまであるという。サポートセンターが核となり、街そのものが「安心」という機能を築きつつある。



「サポートセンター三和」の内部。エレベーター（設置費用400万円）や高齢者が住む上で条件をそろえている。